

-or の派生について*

高橋 勝 忠

0. 序

形態論において、-or 接尾辞は -er の (変) 異形¹ (variant) で、-er と同様に動詞の基体に添加し、「人」や「物」を表す派生名詞を形成する機能をもつと一般に言われている (Marchand (1960), Quirk *et al.* (1972), 成田・長谷川・小谷 (1983), コリンズ コウビルド (1991))。

- (1) *constituter* (-or) (構成する人、制定者),
instituter (-or) (制定する人、組織者),
reviser (-or) (校訂者、校正係),
saturater (-or) (染み込ませる人 (物)、飽和器)²

本稿では、-or は --er とは別の形態素として捉え、-or が -er の異形と言えない幾つかの証拠を提示する。第1節では、-or 派生を動詞由来名詞と分析することから生じる問題について、歴史的、形態的、意味的観点から論じる。ま

* 本稿は、第13回甲南英文学会 (1997年6月28日、甲南大学) の席上で口頭発表したものに加筆修正を行い、発展させたものである。席上において、出席者の方々から貴重なコメントをいただいた。ここに記して感謝の意を表したい。

1 田中他編 (1988, p.707) によると、「二つ (以上) の言語形式が構造や意味を変化させずに交替しうる関係にある場合、それらの形式を (変) 異形という」。

2 OED には *saturater* の綴りは記載されていない。(1) の他の例に関しては、OED, RHD 共に -er と -or の派生が同じ意味をもつ交替可能な語として記載されている。

た、レベル順序づけの仮説に従うと -or 派生はどのように扱われるかについて検討する。第2節では、高橋（1993）で提案した -(at)ion 切り取り規則に基づき、-or 派生は X(at)ion の派生名詞形から -(at)ion 切り取り後、-or を添加することにより生成される可能性とその妥当性について言及する。-(at)ion 切り取りによる -or 派生の定式化には、X(at)ion の派生名詞形の存在が前提となるが、American Heritage Dictionary (electronic version, 以降、AHD とする) で検索すると、90%以上の -or 派生に -(at)ion の派生形が存在することが明らかで、辞書的にも -(at)ion 切り取りによる -or 派生の定式化が妥当なものであることを証明する。

1. -or の -er との相違点

最初に -er と -or の歴史的事実について言及する。Jespersen (1942, pp.224-227) によると、-er の機能は当初、Londoner や New Yorker のように名詞に添加し「人」を表した³。しかし、OE の時代に -er は動詞から動作主名詞を形成する手段としての機能が重要性を帯びようになる。その後、-er は動詞由来名詞として発展し、音声的には [-ə] と同じ -or や -ar の接尾辞と混同した使われ方をする (e. g. senator, singular)。Marchand (1960, p.221) によると -or (-ar) の接尾辞は元来 -er と無関係で、音声的類似性から -er と同じ接尾辞に見做されたことが報告されている。その証拠として、-or (-ar) 派生には -er 派生とは逆に名詞形から動詞形を形成する逆成 (back-formation) の過程が見られる (e. g. editor → edit, operator → operate, beggar → beg, burglar → burgle)。

英語本来の -er の綴りは特に15世紀から16世紀にかけて頻繁に使われるが、-or (-our) や -ar の綴りが、16世紀から17世紀にかけてラテン語や仏語の影

3 厳密に言うと、-er はラテン語の -arius から由来するが、すべてのゲルマン語 (Gothonic languages) に共通して見られる動作主名詞 (agent substantives) の語尾として発展した。一方、-or はラテン語の -ator から由来するが、ME では仏語の影響を受け -our の綴りとなり、やがて -or の形に簡素化されたものと考えられる。

響を受けて英語の中に借入されることになる。例えば、アングロ・フランス語⁴ (Anglo-French) の *interpreter*, *receiver* が -our から -er に変化し、*bachelor*, *chancellor*, *sailor* のように ME では -er の綴りであったものが -or に変化したのはこの辺りの歴史的事情による。その後、綴りは現状のように定着するが、*composer* (作曲家) や *compositor* (植字工) のように英語本来の綴り (-er) とラテン語の綴り (-or) を併せ持つ語が少数ながら見受けられる。いづれにしても、語源的には -er は英語本来の [+native] の特性の語に添加し、-or はラテン系の [+latinate] の特性の語に添加すると言えよう。従って、(2) のように -er と -or 派生において容認性が異なるのは、基体に課される語源的制限により説明がつくものと思われる⁵。

- (2) a. *believer* (*-or), *builder* (*-or), *painter* (*-or)
 b. *advocator* (*-er), *calculator* (*-er), *donator* (*-er)

しかしながら、通時的 (diachronic) には -or 派生が動詞由来名詞でない逆成の事実があり、共時的 (synchronic) には動詞から派生されたと見做されない (3) のような -or の語がかなりの数に上ることから判断すると⁶、-or は純粹に動詞由来名詞の -er の異形とは言えないように思われる。また、-or を -er

4 1066年のノルマン人の征服 (Norman Conquest) から300年の間、イギリスで用いられた仏語のことをいう。石黒他 (1987, p.53) によると、この時期に英語に入った仏語の数は約1万語で、その中の75%が現代英語に残っている。

5 桑原他 (1985, p.447; p.456) は、これらの語源的制限に加え -er はクラス2、-or はクラス1と分析する。彼等の指摘によると、-or がクラス1なのは *doctoral* や *professorate* のように -al, -ate のクラス1の接尾辞が -or の後に付加できることによる。彼等は -or を -er の異形として見做しているのか、別の形態素として捉えているのか明確ではないが、-er, -or 共に非状態動詞に付加することを仮定しているため、本稿で指摘する -or 派生の動詞由来の問題が生じることになる。

6 例えば、*doctor* は通時的にはラテン語の *doct* (teach) + *or* であるが、共時的には動詞の痕跡が見えない新古典複合語である。Walker (1983) の *Rhyming Dictionary* にはこの種の語が約100語、載せられている。

の異形と捉えるなら、(2) のように -er と -or が交替できない事実は語源的制限を加えないかぎり説明できなくなる。

(3) author, doctor, emperor, mirror, terror, etc.

-or 派生が動詞由来名詞と言えないもう一つの歴史的証拠を挙げる。-or 派生が動詞から派生されると仮定すると、その動詞よりも -or 派生が歴史的に後に位置づけられると考えられる。従って、もし動詞形の方が -or の派生名詞形より新しい文献に見られる場合、新しい語が古い語を生成するという歴史的矛盾を生じさせることになる。-or 派生の幾つかの語を調べてみるとこの矛盾を引き起こす例が存在することに気づく(括弧内の数字は、OED に載せられている一番古い文献の年代を示す)。

(4) 動詞形 : administrate (1639)	名詞形 : administrator (1514)	administration (1315)
conserve (1848)	conservator (1394)	conservation (1374)
detract (1449)	detractor (1382)	detractation (1340)
dominate (1611)	dominator (1450)	domination (1386)
donate (1845)	donator (1449)	donation (1425)
exact (1529)	exactor (1382)	exaction (1380)
narrate (1656)	narrator (1611)	narration (1432-50)
pronate (1836-9)	pronator (1693)	pronation (1666)
protect (1526)	protector (1375)	protection (1375)

ここでまた、-(at)ion の形が動詞形より古い文献に見られるということは、-(at)ion 自体が動詞から派生されたのではなく、動詞自体が -(at)ion の形から逆成により生じたことを物語っているのかもしれない。いずれにしても、(4) に挙げた歴史的な事実は -or 派生が動詞由来名詞ではない証拠を与える。

次に、形態的観点から -or と -er の相違について見てみよう。先程、

composer, compositor の語について言及したが、これらの語は -er が動詞の原形に添加し、-or は動詞の異形態⁷ (allomorph) に添加していることに気づく。

さらに、別の例を挙げてみよう (括弧の動詞は以降、原形を示す)。

- (5) *applier, applicator* (apply) *composer, compositor* (compose)
describer, descriptor (describe) *divider, divisor* (divide)
extender, extensor (extend) *simplifier, simplificator* (simplify)

-er と異なり -or は動詞の原形に添加していない。従って、(5) の -or 派生を導くのに異形態規則 (allomorphy rule)⁸ が必要になる。しかし、このような規則は -er の異形として余分な規則であり、どのような状況の下で適用されるのかははっきりしない。なぜなら、-or が (5) と同じような音韻環境でありながら (6) のように異形態規則が働かない場合があるからである⁹。

- (6) *locator* (locate) *depositor* (deposit) *acceptor* (accept)
televisor (televise) *sensor* (sense)

この問題は、複雑な記述になることを除けば、-or の動詞の異形態は、レキシコンで個別に形態的に条件付けられると仮定することにより排除されるのかもしれない。しかし、-or 派生を動詞由来名詞であると仮定するかぎり、その記述は動詞の異形態として指定されることになる。そこで新たな問題が浮上する。

7 安井編 (1971, p.16) によると、ある形態素が、その生ずる環境によって形を異にすると、それらの形を同一形態素に属する異形態という。Katamba (1994) は異形態が音韻、文法、語彙の三つの観点から条件付けられるとしている。詳細な議論は、Katamba (1994) の第5章を参照のこと。

8 Aronoff (1976, pp.98-110) と注16参照。

9 -ficate で終る動詞は存在しないので具体例を挙げていない。sensor は sense の名詞形に -or が添加して派生されると見做されるかもしれない。

- (7) corporator (*corporate), testator (*testate), tractor (*tract),
traditor (*tradit)

(7) の諸例は、括弧に示す基体の動詞形が現在では認められない形である。従って、これらの -or の語は動詞の異形態としてレキシコンに記載できない問題が生じる。OED を調べると、corporate (1531), testate (1624), tract (1523), tradit (1657) の動詞形は歴史的には存在したが、現在では古語 (archaic) や廃語 (obsolete) となるか、まれ (rare) にしか使われていないようである。(3) で指摘したように通時的にはラテン語や仏語の動詞に添加したものが、共時的にはその痕跡は見えない。その意味では (7) も同じである。しかし、(3) の語と異なり (7) のいずれの語も名詞形の -(at)ion の形が存在する。一般的には、-(at)ion は動詞から派生すると考えられるので (7) の語は (3) の語よりも -or の基体の動詞との結びつきが残っているものと思われる。-or 派生を動詞由来名詞と仮定すると、共時的には動詞の資格を失っている (3), (7) の語が問題となり、その結果、-or の派生語全体をレキシコンに登録すると、両者の内部構造の違いが捉えられなくなる。本稿では、(3) の語はレキシコンに単一の語としてそのまま登録されると仮定し、(7) の語は -(at)ion 切り取りにより -or 派生を生成後、レキシコンに登録されると仮定する (第2節参照)。

最後に、-or と -er の意味的相違について指摘する。島村 (1990, p.59) は、-er (-or) 派生の解釈の可能性として、(8) のように「動作主」と「道具」の両方の意味をもつ場合、(9) のように普通は「動作主」として使われ「道具」の意味をもたない場合、(10) のように「道具」の意味だけをもつ場合、の3通りがあることを指摘する。

- (8) toaster ((パン・チーズなどを) 焼く人; トースター), dryer (乾かす人; 乾燥機), calculator (計算する人; 計算器), cultivator (耕作

者；耕運機), etc.)

(9) writer, painter, drinker, employer, etc.

(10) cooker (鍋)

また、この中で、-er が「道具」だけの意味をもつ (10) のような例は数において非常に制限されるのに対し、(8), (9) の「動作主」の意味をもつ -er の生産性は高くなることを主張する¹⁰。

確かに、-er の意味は「道具」より「動作主」の方が多くなるのは事実であろう¹¹。しかし、-or の意味はどうであろうか。コリンズ コウビルド (1991, p.49) によると、-or は -er より「物」として使われる傾向が強いようである。実際のところ、(10) とは対照的に -or が「物」の意味だけしかもたない (11a) の派生語や、「動作主」の意味をもつが一般的には (11b) のように「物」の意味でしか使われない派生語 がかなりあるようである¹²。

- (11) a. carburetor (キャブレター), detonator (起爆装置), escallator (エスカレーター), lachrymator (催涙ガス), refrigerator (冷蔵庫), resistor (抵抗器), etc.
- b. accelerator (アクセル、促進剤), alternator (交流機), commutator (整流器) elevator (エレベーター), incinerator

10 島村 (1990, p.66) は、-er の生産性の高さを項構造 (of + NP) の継承と関連付ける。-er が典型的な「動作主」の意味をもつ場合、「道具」を表す場合と異なり、動詞が取りうる [Agent, Theme] の項構造を -er は継承するが、「道具」の意味では [Agent, Theme] の項構造を -er が継承できないと島村は考える。この点に関して高橋 (1989, p.60) は、別の捉え方をする。

11 ただし、-er の「道具」としての意味の生産性が低いとは言えないように思われる。Rappaport and Levin (1992, p.131) は、-er の「道具」を表す語彙はコンピュータ科学 (computer science) の用語として、たえず造られると述べている (e. g. assembler, compiler, parser, etc.)。

12 用例は、lachrymator, resistor を除くと Rardin (1975, p.95) から集めたもの。resistor は「動作主」の意味では -er になる。

(焼却炉), ventilator (換気扇), etc.

また、-or に「動作主」の意味を併せ持つ場合は、単独では用いられないことが多い。例えば、detector (発見者、探知器), connector (連結者、連結器), conveyor (伝達者、コンベアー) は共に「動作主」と「物」の意味を併せ持つが、(12) のように「動作主」の意味では表現できない¹³。

(12) *He is a detector / connector / conveyor. (cf. It's a detector / connector / conveyor.)

さらに興味あるのは、複合語になると「動作主」の意味はなくなり、-er の代りに -or が使われる点である¹⁴。

(13) lie detector (*-er) (うそ発見器), crank connector (*-er) (クランク連結器), belt conveyor (*-er) (ベルト コンベアー)

このように、-or は「物」の意味で使われる傾向があるが、-or が「動作主」

13 ただし、He is a collector のような表現はある。おそらく、彼の情報として、文脈上、a coin collector (コインのマニア) とか a stamp collector (切手収集家) であるということがあらかじめ分かっているからであろう。ここで、-er が「動作主」と「物」の意味を併せ持つ場合も、-or と同じことが言えるかもしれない。Rappaport and Levin (1992, p.134) によると、opener は「開ける人(物)」の二つの解釈が可能だが、「開ける」ような行為を遂行するように意図される人 (someone intended to perform an action such as opening) は、一般的には認められないので opener は単独では「道具」として解釈され易いことを指摘する (cf. door man (ドア係), door opener (鍵のかかったドアを開ける器具))。opener と同じ語用論的な意味の制約が (12) の例文に働くのかもしれない。

14 a detector (-er) of lies, a connector (-er) of cranks, a conveyor (-er) of a belt とすると、「動作主」の意味しか出てこない。最後の例は、状況的に捉えにくい語用論的な問題は残る。

の意味で使われる場合に、基体の動詞から予測できない語彙化した意味になることがある。特に、アメリカでは -or の新しい用法が盛んで、今日でも生産的であることが Jespersen (1942, p.230) で示唆されている。

- (14) applicator (屋根葺き職人), exhibitor (映画館の支配人), solicitor (セールスマン)

-er と -or の違いについて歴史的、形態的、意味的観点から述べてきた。これらの相違を決定する要因は何であろうか。Siegel (1974), Allen (1978) のレベル順序づけの仮説に従うなら、-er はレベル2で -or はレベル1ということに起因するのであろうか。その場合に -or 派生は動詞由来名詞と捉えるのがよいのであろうか(桑原他 (1985) 参照)。レベル順序づけ仮説の主旨は、(15) の「音韻的、形態的基準に基づき接辞はレキシコンの中であらかじめレベル1 (=クラス1)、レベル2 (=クラス2) と指定される」と「接辞化の際に、レベル1からレベル2に向かって行なわれ、その逆は容認できない派生を生み出す」の二点にある。

- (15) a. 基体の強勢移動 (stress shift) や基体または接辞の分節的变化 (segmental change) を引き起こす接辞をレベル1と呼び、そのような音韻的变化をもたらさない接辞をレベル2と呼ぶ。
 b. レベル1接辞は、拘束形態素 (bound morpheme) に添加できるが、レベル2接辞は自由形態素 (free morpheme) にのみ添加される。

Aronoff (1976, pp.37-38) や島村 (1989, p.101), 島村 (1990, p.22) によると、レベル2接辞の添加された派生語 (e. g. X-ness) はレベル1接辞の添加された派生語 (e. g. X-ity) より生産性が高く、意味的に透明であることが指摘されている。AHD で検索すると -er 派生は 3027 語で、-or 派生は 1321 語

であった。この数字から単純に分かることは、-erの方が-orより生産性が高いということ、従って、-erはレベル2で-orはレベル1であると言えるかもしれない。同様に、意味の透明度に関して、-erは-orより透明と言えるのであろうか。-erは「動作主」の意味をもち、-orは「物」の意味をもつ傾向があるという上記の議論を踏まえると、この捉え方は正しいように思われる。しかし、-erをレベル2、-orをレベル1とすると、(15)の基準に合わない(16)の派生はどのように扱ったらよいのであろうか。

- (16) a. *phôtograph* → *photôgrapher*, *télegraph* → *telégrapher*
 b. *prayer* / *préiə* / (祈り人) → / *prɛə* / (祈り),
 layer / *léiə* / (積む人) → / *lɛə* / (層)
 c. *cutler* (刃物師), *grocer* (食料雑貨店主), *mercier* (呉服屋)
 d. *cômmentate* → *cômmentator*, *démonstrate* → *démonstrator*,
 visit → *vísitor*, etc.

(16a)において、-erが強勢移動を引き起こすのは-graphの基体をもつ場合に制限されるので例外として扱えるであろう。(16b)において、-erは分節的变化をもたらすが、「祈り」や「層」の意味に語彙化し、語全体がLexical Nとなっている。(16c)において、-erは拘束形態素に添加しているが、(16b)と同様に語全体をLexical Nとしてレキシコンに登録することで解決されるであろう。しかし、レベル順序づけの仮説は、接辞のレベルをレキシコンに指定しておくので、レベル2接辞の派生語が語彙化する場合いつもこの種の問題に直面する¹⁵。(16d)において、-orが強勢移動に関与せず自由形態素に添加

15 -er派生が「物」の意味をもつ場合、構造的にLexical Nとなるが、(16b)と異なり基体の分節的变化を生じさせない例がかなり多く見られる(e.g. *mixer* / *miksə* / (ミキサー), *transformer* / *trænsfɔ:mə* / (変圧器)) これらの-er派生は、(15a)の基準に従うとレベル2ということになるが、意味的には「混合する人」、「変化させ

するのは、-or がレベル2 接辞の特徴をもっていることを示す。しかし、生産性や意味の観点から -or がレベル1 であること、(5) のように -or の異形態が存在することを考慮に入れると¹⁶、-or がレベル2 というのは矛盾することになる。-or 派生を動詞由来名詞と分析することから生じるこの問題は、次節において、-(at)ion 切り取りを仮定することにより排除される。本稿では、-or 派生をレベル順序づけの仮説に基づき分析するのが目的ではないが、-or はレベル1 に属すると仮定し、以下、議論を進めることにする。

2. -or 派生の定式化とその妥当性

-or 派生は動詞から由来すると仮定すると、その派生は動詞の意味を継承すると考えるのが妥当であろう。しかしながら、-or 派生は動詞の意味よりも -(at)ion 派生語の意味に類似していることに気づく。

- (17) compositor (植字工), composition (植字), compose (活字を組む)
 divisor (除数), division (除法), divide (割る)
 extensor (伸筋), extension (伸張) extend (手足を伸ばす)

また、形態的にも異形態の -or 派生は -(at)ion 派生語の形に類似する。そこで、-or 派生は動詞から由来するのではなく、(18) のように、-(at)ion の派

る人」の動作主の意味と異なる。従って、レベル順序づけの仮説ではこれらの例に対し、-er は基本的にはレベル2 であるが、同時に意味的には不透明になる非派生語も生み出すというアドホックな説明をしなくてはならない。これは、接辞のレベル指定の際に意味基準を考慮に入れないレベル順序づけ仮説の問題点である。基体の音韻的、形態的变化をもたらさないレベル2 接辞 (e. g. -able) の語彙化がどのように捉えられるかについては高橋 (1992) を参照のこと。

16 Aronoff (1976, p.99) は、切り取り規則と異形態規則を同じように捉え、両規則ともレベル1 接辞 (+境界接辞) に関与する形態素を調整する規則 (adjustment rules) と考える。Aronoff は、これらの調整規則を音韻規則より先に適用される形態規則として位置づけている。

生名詞形¹⁷から -(at)ion 切り取り¹⁸を行い、その基体に -or を添加することにより生成されると仮定してみよう。一方、-er 派生は (19) のように動詞に直接 -er を添加することにより生成されると仮定する (以降、- は切り取りを、+ は添加を意味する)。

(18) X(at)ion - (at)ion + or

(19) V + er

(18), (19) の -or, -er 派生の定式化に基づくと、(5), (6), (7) の派生語は次のように導かれる。

(20) = (5)

apply + er = applier (apply する人 (物))

application - ion + or = applicator (綿棒、塗薬器)

compose + er = composer (作曲家、構成者、調停者)

composition - ion + or = compositor (植字工)

describe + er = describer (記述者)

description - ion + or = descriptor (記述子)

divide + er = divider (分割する人 (物)、仕切、分割コンパス)

division - ion + or = divisor (除数)

extend + er = extender (伸びる人 (物)、水増し用の物質)

extension - ion + or = extensor (伸筋)

17 domination, education, personation などの Xation 派生語と competition, direction, perception などの Xion 派生語を統合して用いる。

18 -ation 切り取りと -ion 切り取りの二つの切り取り規則を統合したもので、派生語によっては donor, donator; obligor, obligator のように両方の切り取りを適用して生成されるものもある。さらに、intervenor が intervention から派生すると仮定すると、-tion 切り取りも必要になるであろう。

simplify + er = simplifier (簡単にする人(物))

simplification - ion + or = simplificator (簡単にする人)¹⁹

(21) = (6)

location - ion + or = locator

([アメリカ英語] 土地境界設定者、電波探知機)

deposition - ion + or = depositor (預金者、寄託者、沈殿器)

acceptation - ation + or = acceptor (受諾者、通波器、受容体)

television - ion + or = televisior

(テレビ放送者(まれ)、テレビジョン装置)

sensation - ation + or = sensor (感知装置、センサー)

(22) = (7)

corporation - ion + or = corporator (法人団体の一員)

testation - ion + or = testator (遺言者)

traction - ion + or = tractor (トラクター、牽引用トラクター)

tradition - ion + or = traditor

(伝統を伝える人(まれ)、初期キリスト教徒の)裏切り者)

(18) は、表面的には動詞由来名詞と見做されるかもしれない。なぜなら、(21) において -or 派生は -(at)ion 切り取り後、原形動詞と同じ形になり、その基体動詞に -or が添加されて派生されると考えられるからである。しかし、-or 派生を動詞由来名詞と分析すると (20) の -or 派生を導くには異形態規則が必要となり、(22) の -or 派生を導くには共時的には存在しない動詞を仮定

19 simplificator は -er 派生と同じ「動作主」の意味をもつ。従って、他の -or 派生に見られる物的な意味や simplifier とは別の新しい「動作主」の意味が今後、出て来ないかぎり、やがて simplificator は使われなくなるのかもしれない。OED によると、classifier, modifier の語はまれにしか使われない。その理由は、これらの派生語が -er 派生の classifier, modifier と同じ「動作主」の意味しかもたないことによるのではなかろうか。

する必要があった。従って、(18) は動詞由来名詞ではなく、名詞由来名詞の定式化として捉えたい。すなわち、基体の名詞が、-(at)ion 切り取りにより調整され、その形に -or が添加すると仮定する。このように考えると、(20) では異形態規則が不必要になり²⁰、(22) では現存しない動詞を仮定するのではなく、現存する名詞形 (i. e. -(at)ion) から派生すると分析することができる。また、-(at)ion の派生名詞形を前提にすると、歴史を溯っても動詞形が存在しない (23) のような -or 派生も生成することが可能となる。

(23) apparition - ion + or = apparitor (*apparit)

(下役人、出現者(まれ)) cf. 仏語 *apparaître* = to appear
 lection - ion + or = lector (*lect)

(聖句を読む人、(大学の) 講師) cf. ラテン語 *lect* = to read
 monition - ion + or = monitor (*monit)

(戒告者、モニター) cf. 仏語 *monère* = to advise
 sternutation - ion + or = sternutator (*sternutate)

(くしゃみ性毒ガス) cf. 仏語 *sternüter* = to sneeze

次に、-(at)ion 切り取りの妥当性について逆成と語彙化の観点から述べる。(4) において、X(at)ion の派生語が基体の動詞より先に生成される可能性があることを示した。Marchand (1960, p.203) によると、-ate で終る動詞の名詞形 (-ation) は一般的にその動詞形よりも古いことが示唆されている。これは、逆成の歴史的事実を反映するが、実際のところ、(24) のように -ation から -ate の多くの動詞が逆成により生成され、また、(25) のように -ate で終らない動詞も名詞形から逆成により生成されるようである²¹。

20 もちろん、動詞から -(at)ion の派生名詞形を生成する際には、異形態規則が必要になる。

21 (24), (25) の用例は、Jespersen (1942, p.447) と Marchand (1960, p.309) から取ったもの。

- (24) alternation → alternate, aviation → aviate,
 commentation → commentate, donation → donate,
 negation → negate, spectation → spectate, etc.
- (25) election → elect, execution → excute, (re) action → (re) act,
 revision → revise, television → televise, etc.

ここで逆成の過程をよく見ると、派生名詞形 (- (at)ion) の ion が落ちることにより動詞形が生成されることに気づく。この操作は (18) における - (at)ion 切り取りの過程に類似する²²。従って、-or 派生における - (at)ion 切り取りの定式化は逆成という歴史的過程から動機づけられるように思われる。また、逆成の事実と関連して、- (at)ion の派生語が -or の派生語より早く存在することを指摘しておく。(4) から明らかであるが、- (at)ion の派生語が -or の派生語より古い文献に見られるこの事実は他の多くの派生語についても言える。このことは、-or 派生が - (at)ion の派生名詞形から生成される可能性を歴史的に裏付けるものと思われる。

Aronoff (1976, pp.127-128) は -able の解釈が合成的 (compositional) になる場合と非合成的 (non-compositional) になる場合を分け、前者の解釈は #abl (= レベル 2) の接辞が、後者の解釈は +abl (= レベル 1) の接辞が担うと仮定する。Aronoff は、このように -able に二つのレベルを指定し、-able がレベル 1 接辞と見做される条件の一つとして +At 切り取りを仮定する。Aronoff が挙げる次の例を考えてみよう。

- (26) We ate a toler (*at) able lunch.

22 ただし、(24), (25) は名詞から動詞を生成するのに対し、- (at)ion 切り取りは名詞から名詞の形を調整する点が異なる。

(26) の文は「私達は、まあまあの昼食を食べた」と解釈される。tolerable (我慢できる) には tolerable (我慢できる、まあまあの) がある。「まあまあの」の語彙化した意味 (= 非合成的な意味) がない。従って、「我慢できる昼食」というのはおかしいので a toleratable lunch は排除される。Aronoff は、語彙化はレベル2の語 (X#abl) には決して生じないとは言っていないがレベル1の語 (X+abl) にはいつも語彙化した意味が含まれると主張する²³。(26) の tolerable の解釈に見られるように、+At 切り取りが語彙化の誘因と仮定すると、-(at)ion 切り取りも語彙化を生じさせると考えるのが妥当である。従って、(18) の定式化に基づく -(at)ion 切り取りによる -or 派生が語彙化した意味をもつと考えるのは自然であろう。実際のところ、(11) における -or の派生語が「物」の意味で使われたり、(14) における -or の派生語が基体の動詞から予測できない意味になるのは、X (at)ion の派生名詞形から -(at)ion 切り取りにより、これらの派生語が語彙化されるからであると考えられるかもしれない。

異形態や語彙化をもたらすのはレベル1接辞であること、また、語彙化を促す切り取り規則はレベル1接辞の基体に適用されることを本稿では述べてきた。従って、これらの特徴をもつ -or 接辞はレベル1と仮定される。しかしながら、-or 派生を動詞由来名詞と分析すると、-or 接辞がレベル2と見做される問題が (16d) の諸例に生じた。

(27) = (16d)

cómmuntate → cómmentator, démonstrate → démonstrator,
vísit → vísitor, etc.

23 レベル2の語彙化の例として Aronoff は advisable (分別のある), excitable (敏感な), sensible (顕著な) を挙げている。しかし、レベル1の語が語彙化しない例もあるように思われる (e. g. educable (= educatable))。

すなわち、(27) において -or が自由形態素に添加し強勢移動に関与しないことから、(15) の定義に基づき、-or はレベル2 接辞であると見做されたのである。この問題は、-(at)ion 切り取りを仮定することにより、簡単に解決される。

- (28) *commentátion* - ion + or = *cómmentator*
demonstrátion - ion + or = *démonstrator*
visitátion - ation + or = *vísitor*

(28) において、-or が Xation の派生名詞形に添加する際に -(at)ion 切り取りが同時に適用されると仮定する。その基体の形は偶然、動詞の形に似ているが派生名詞の調整された形、すなわち派生名詞の拘束形態素に添加することになる。従って、(15b) の定義上の問題は生じてこない。また、Xation の派生語と -or 派生語との間に強勢移動が見られるので (15a) の定義上の問題も回避される。-or を動詞由来名詞と分析すると (27) の諸例を説明するのにレベル順序づけ仮説の定義上の問題が残されるが、(28) のように名詞由来名詞と捉えることによってこの問題は排除される。しかし、(1) のように -er と -or が交替可能な事実に関して、(18) と (19) の定式化に従うと、今述べたレベル順序づけ仮説の定義上の問題は避けられるにしても、何故、-or 派生が -er 派生と同じ意味をもつかが疑問として残る。この問題は、今後の課題としたい。

最後に、(18) の定式化そのものについて考えてみよう。(18) の定式化は -or 派生の語形成過程を単に示したものではない。(18) において、-or 派生が成立するためには -or 派生に -(at)ion の派生名詞形が存在するということが前提になっている。これは、-(at)ion の派生名詞形が存在すると必ず -or 派生を生成するということではなさそうである (e. g. *analyzation* → **analyzator*; *circumscription* → **circumscriptor*)²⁴。また、-or 派生が成立するためには -or 派生に必ず -(at)ion の派生名詞形が要求されるということでは

ない (e.g. (3))。しかし、(3) のような新古典複合語の例を除くと、-or 派生が実在の語 (actual words) として認められる場合、連動して -(at)ion の派生名詞形が存在すると言えるであろう。AHD で -or 派生が可能な場合、-(at)ion の形が認められるかどうかを検索し Appendix にした。それによると、90%以上の -or 派生に -(at)ion の派生名詞形が存在することが明らかで、(18) の定式化は辞書の面からも記述的妥当性をもつものと思われる。

3. 結 語

本稿では、(18) の定式化に従い -or を動詞由来名詞として分析するのではなく、名詞由来名詞として分析することにより -or 派生が生成されることを示してきた。結果として、異形態の問題に抵触しないで統一的に -or 派生を生成することが可能となり ((20), (21), (22))、基体の動詞形が存在しない場合でも -or 派生を生成することが可能となった ((22), (23))。(18) の -(at)ion 切り取りの妥当性として、最初に逆成の過程に平行することを指摘した ((24), (25))。次に、-(at)ion 切り取りが語彙化の誘因であると仮定することにより、-or 派生が -er 派生より物的な意味や基体の動詞から予測できない意味が生じる理由を説明することができた ((11), (14))。(18) の定式化で言っていることは、-or 派生の成立には -(at)ion の派生名詞形の存在が前提になること、逆に言うと、-(at)ion の派生名詞形が存在しないときには -or 派生が成立しないということである (一部、(3) のような例外はある)。従って、(2a) における -or 派生が成立しないのは *believe* (at)ion, *build* (at)ion, *paint* (at)ion の派生名詞形が存在しないことを理由に説明できるかもしれない。そ

24 analyzer, circumscripator は不可能な語 (impossible words) か、それとも可能な語 (possible words) であるが実在の語 (actual words) ではないと考えるべきか。以前には存在したが現在では使われていない -or の派生語が意外と多いことから判断すると (e.g. *computator, *interpretator, *inscripator, *transcripator)、analyzer, circumscripator は使われる条件を満たすと将来可能な語になるかもしれない。

の結果、-or 派生の語源的制限を加える必要がなくなり、レキシコンの記述がそれだけ簡潔化されることになる。ただし、-er 派生は (19) のように動詞から生成されると仮定しても、(1) と (2) を比較して分かるように、-(at)ion の派生名詞形が存在することを理由に -er 派生が成立しないことの説明はできない。しかし、Appendix から分かるように -(at)ion の派生名詞形が存在する場合、-er 派生が許される例はかなり少ないようである。従って、一般的傾向として、-er 派生は -(at)ion 派生名詞の基体動詞には添加しないと言えるのかもしれない。Appendix にカウントされている -(at)ion の派生名詞形は、存在する -or 派生に対応して検索されたもので、存在しない -or 派生に対応する -(at)ion の派生名詞形は検索していない (e. g. *analyzation* (**analyzator*) cf. *analyzer*)。どのような -(at)ion 派生名詞の -or 派生が阻止されるのか、-er 派生の意味と比較しながら今後の研究課題としたい。

References

辞典

- AHD* = *American Heritage Dictionary* (Electronic version for Macintosh).
Third edition. American Heritage. 1994.
- Collins Cobuild English Guides: Word formation*. (コリンズコウビルド英語表現活用シリーズ2『語形成』) 秀文インターナショナル. 1991.
- OED* = *The Oxford English Dictionary*, prepared by J. A. Simpson and E. S. C. Weiner. Second edition. Oxford: Clarendon Press. 1989.
- RHD* = *The Random House Dictionary of the English Language*, ed. by S. B. Flexner. Second edition. New York: Random House. 1987.
- Walker's Ryming Dictionary of the English Language*. New edition with supplement compiled by Michael Freeman. Routledge & Kegan Paul. 1983.
- Allen, M. 1978. *Morphological Investigations*. Ph. D. dissertation, University of Connecticut.

- Aronoff, M. 1976. *Word Formation in Generative Grammar*. MIT Press.
- 石黒昭博他. 1987. 『現代英語学要説』東京：南雲堂.
- Jespersen, O. 1942. *A Modern English Grammar on Historical Principles*. Part VI. London: George Allen & Unwin.
- Katamba, F. 1994. *English Words*. Routledge.
- 桑原輝男他. 1985. 『音韻論』（現代の英文法3）東京：研究社.
- Marchand, H. 1960. *The Categories and Types of Present-Day English Word-Formation: A Synchronic-Diachronic Approach*. Wiesbaden: Otto Harrassowitz.
- 成田義光他. 1983. 『発音・綴り・語形成』（講座・学校英文法の基礎 第一巻）東京：研究社.
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech, and J. Svartvik. 1972. *A Grammar of Contemporary English*. London: Longman.
- Rappaport, M. and B. Levin. 1992. “-er Nominals: Implications for the Theory of Argument Structure.” *Syntax and Semantics* (Syntax and the Lexicon) 26, 127-153. Academic Press.
- Rardin, R. B. 1975. *Studies in Derivational Morphology*. Ph. D. dissertation, MIT.
- Siegel, D. 1974. *Topics in English Morphology*. Ph. D. dissertation, MIT.
- 島村礼子. 1989. 「接尾辞 -ness と -ity の生産性について」『津田塾大学紀要』第21号, 99-119.
- 島村礼子. 1990. 『英語の語形成とその生産性』東京：リーベル出版.
- 高橋勝忠. 1989. 「接辞のPP補助部の継承」『英語青年』第135巻. 第2号, 60. 研究社.
- 高橋勝忠. 1992. “Adjective Category Condition in Word Formation.” In *Proceedings of the 5th summer conference 1991 Tokyo Linguistics Forum (TLF 5)*, 181-194.
- 高橋勝忠. 1993. 「語形成における切り取り規則」『言語学からの眺望』（福岡

言語学研究会編) 285-297. 九州大学出版会.

田中春美他編. 1988. 『現代言語学辞典』東京：成美堂.

安井稔編. 1971. 『新言語学辞典』東京：研究社.

Appendix²⁵ : この表は、X (at)or の派生語には X (at)ion の派生語が存在するかどうかを実際的に AHD で検索したものである。表の構成は、X (at)or の派生語を Xator と Xctor の二つのタイプに分け、さらに前者を9通り、後者を3通りの派生語パターンに分け、生産性の高い順に数字で並べたものとなっている。そして、Xator と Xctor の派生語に対し Xation, Xction の派生語が見つからない場合と Xate, Xct の動詞形が見つからない場合は、表の中に*マークを付けて具体例を記載している。括弧内は、OED で調べた結果を追加したものである。例えば、*curation (OED, obs.) というのは、curation の派生語が AHD では見つからないが、OED には廃語 (obs.) としながらこの語を載せていることを意味し、*procuration (OED) というのは、AHD では見つからないが、OED には見つかることを意味する。また、Xator と Xctor に対応する Xater, Xcter が存在する場合は表の中に数字で示し具体例を記載している。なお、Xator と Xctor に対する Xation, Xction の存在率をそれぞれの派生語パターンに%で示している。

Xator	Xation	Xate	Xater
-rator (95) 93%	-ration (88)	-rate (82)	-rater (5)
	*barration *coconspiration *comparison (OED, obs.) *conspiration (OED, obs. rare) *curation (OED, obs.) *imperation (OED, rare) *procuration (OED)	*barrate (OED, obs. rare) *coconspirate *compare (OED, obs. rare) *conspirate *imperate (OED, obs.) *procurate (OED, obs. rare) *cardioaccelerate *corporate (OED, arch.) *counterdemonstrate *inspire (OED) *preparate (OED, obs.) *redintegrate (OED) *respirate (OED)	barrater castrater desecrater macrater narrater
-lator (74) 96%	-lation (71)	-late (71)	-later (5)

25 jetavator (jet + elevator), varactor (variable + reactor) のような混成語 (blends) はリストから除外している。-ector に対する -ection の存在率は 83% であるが、OED の結果を踏まえると 89% になる。

	*bronchodilation *idolation *nomenclature (OED, obs. rare)	*bronchodilate *idolate *nomenclate (OED, rare)	desolater idolater inflater relater stimulator
-nator (54) 100%	-nation (54)	-nate (54)	-nater (0)
-cator (48) 98%	-cation (47)	-cate (46)	-cater (1)
	*judication (OED)	*judicate (OED, obs. rare) *applycate (OED, obs.)	locater
-iator (32) 97%	-iation (31)	-iate (31)	-iater (0)
	*gladiation	*gladiate	
-gator (26) 100%	-gation (26)	-gate (25)	-gater (1)
		*estronavigate	negater
-tator (26) 96%	-tation (25)	-tate (23)	-tater (0)
	*testation (OED)	*testate (OED, rare) *cunctate *sternutate	
-vator (15) 93%	-vation (14)	-vate (13)	-vater (0)
	*levation (OED, obs.)	*levate *conservate (OED, rare)	
-mator (9) 100%	-mation (9)	-mate (7)	-mater (1)
		*lachrymate (OED) *lacrimate	intimater

Xctor	Xction	Xct	Xcter
-ector (36) 83%	-ection (30)	-ect (32)	-ecter (6)
	*hection *proseccion (OED) *rection (OED) *vection (OED, obs. rare) *codirection *effection (OED, obs.)	*hect *prosect (OED, rare) *rect *vect	connector detector effector neglector protector rejecter
-actor (24) 88%	-action (21)	-act (19)	-acter (6)
	*cofaction *contaction (OED, obs.) *subcontraction	*cofact *benefact (OED) *fact *malefact *tract	abstracter attracter compacter distracter exacter subtracter
-uctor (8) 100%	-uction (8)	-uct (8)	-ucter (2)
			constracter obstracter